

Close Up

クローズアップ 交通教育センター

夜間走行時の危険性と事故を防ぐための運転について理解してもらう

交通教育センターレイボー埼玉（以下、レイボー埼玉）は、企業ドライバー向けの安全運転研修のプログラムの1つとして夜間研修を実施している。日没後にコースを走行し、夜間の交通事故を防ぐための運転を身につけてもらうことが目的だ。

この夜間研修を取り入れている企業の1つが、コカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）（本社：東京都港区）である。同社はコカ・コーラ社製品の製造をはじめ、1都2府35県で物流・輸送・販売を行っている。毎年、配属先で製品の配送を担当する新入社員を対象に「安全運転2tトラック研修」を実施している。同社総務本部安全推進課課長の福田隆さんは「新入社員のほとんどはトラックに乗り慣れていません。そのため、業務で運転を始める前に、トラッ

クに特化した訓練をしておく必要があります。また、技術だけでなく、それを支える安全意識を高めることも、この研修の目的です」と説明する。「日没後は仕事を終えて拠点に戻るタイミングですから、疲れや気のゆるみから事故を起こしやすい時間帯といえるでしょう。そこで、夜に運転する時の危険性を理解してもらおうと夜間研修を取り入れました」。

「安全運転2tトラック研修」は9月11日から12日にかけて実施され、新入社員18名が受講した。1日目の実技はトラックの車両感覚を身につけるための訓練からスタート。そして、日が暮れると、夜間研修となった。

受講者は一人ずつトラックを運転し、指定されたコースを1周する。コースの途中には様々な障害物を用意。例えば、直線コースの先に7



インストラクターが新入社員にトラックの安全運転に必要なポイントを指導



夜間研修のほか、狭路走行などトラックの車両感覚をつかむためのトレーニング



ゴム製のパイロンウエイト（点線）を使用した路面の夜間視認性を確認する走行

色のパイロンを横に並べ、夜間の色による視認性の違いを実感してもらう。また、曲がり角の先には黒いゴム製のパイロンウエイト（写真参照）が置かれていたが、ほとんどの受講者は存在に気づかず踏んでしまった。全員の走行が終わると、レイボー埼玉の望月圭太インストラクターがコースの各所で解説。「夜間は明るいところに注意が向きやすいので、交差点を右左折する時は暗い場所から現れる歩行者や自転車を見落とさないよう速度を落として十分に周囲の状況を確認してください」とアドバイスした。さらに、ヘッドライトのロービームとハ

イビームによる見え方の違いや蒸発現象などを確認した。

受講者の一人は「夜間はライトが照らしているところ以外にも気を配って運転することが大切だと感じました。特に歩行者の存在には十分注意したいと思います」と感想を話す。「今、業務で使用する車両は衝突軽減ブレーキが装備されているものに順次入れ替えていますが、クルマの機能に頼るのではなく、安全運転に必要な基本行動と意識をしっかりと身につけることが重要だと考えています」と福田さんは力強く語った。



直線コースを50km/hで7色（白、黄、赤、緑、青、茶、黒）のパイロンに向かって走り、見えやすい色と見えにくい色を確認



夜間にクルマ同士がすれ違う際、その間に位置する歩行者が見えなくなる蒸発現象を再現

Close Up

クローズアップ 福祉安全運転

自動車教習所と作業療法士との連携がHondaの支援によって広がる

（一社）鹿児島県指定自動車教習所協会と（一社）鹿児島県作業療法士協会は、高次脳機能障がいの方々の運転再開支援を協働で推進するため、9月9日、鹿児島県運転免許試験場で「第1回鹿児島県指定自動車教習所協会・作業療法士協会 合同研修会」（後援：鹿児島県警察本部免許管理課、協力：本田技研工業（株）安全運転普及本部）を開催した。

鹿児島県作業療法士協会会長 竹田寛さんは開催の背景を次のように説明する。「私たちはリハビリテーションを通じて病気になった方の社会復帰を支援しています。その中には、自動車運転に関する相談があり、適切なサービスを提供するための仕組みづくりが必要だと考えました。そこで昨年、高齢者・障がい者運転検討委員会を立ち上げ、協会全体で取り組むことにしました」。

同委員会の中心となっている井上勇人さん（青

雲会病院 作業療法士）は「当協会の運転事業部は文献などを参考に、運転能力と相関が高いと考えられる検査や取り組みについて調べ、模索していますが、実際の運転技能そのものを知ることはできません。対象者により深く、より充実したアプローチを行うためには実車による評価が必要で、その実現には自動車教習所の協力が不可欠と考えています」という。そして、井上さんは鹿児島県指定自動車教習所協会にはたらきかけを行った。同協会専務理事 小蓬原忠俊さんは「近年、高次脳機能障がい者の方々の自動車運転再開のニーズの高まりに伴い、県内の作業療法士等から教習所に対し実車評価の支援が求められているところです。県協会としてもこれに応えるため教習所をはじめ関係機関・団体と連携し、支援方法の確立に向けて諸課題に取り組んでいきたい」と話す。



手でアクセル・ブレーキ等の操作をする運転補助装置が取り付けられた教習車両で参加者全員が「自操安全運転プログラム」を体験



パイロンスラロームなどで複数の課題（指定された速度を維持しているか、適切なハンドル操作ができているかなど）を同時に遂行できる能力を評価



交通教育センターレイボー熊本での実施事例をもとに、「自操安全運転プログラム」について黒澤明良インストラクターが説明

研修会には鹿児島県内の自動車教習所の教習指導員34名、作業療法士など医療関係者46名が参加した。まず、井上さんから作業療法士が運転再開に向けた支援の実態を紹介。次に、鹿児島県警察本部交通部免許管理課課長補佐 水上朋雄さんが一定の病気に係る運転者対策について解説した。この後、作業療法士が患者役となり、教習指導員が助手席に同乗してHondaが開発した「自操安全運転プログラム※」を体験。交通教育センターレイボー熊本の黒澤明良インストラクターがパイロンスラロームなどの課題によって、指定された速度を維持しているか、

適切なハンドル操作ができているかなど、その方の現状を把握することがポイントであると教習指導員と作業療法士に説明した。自動車教習所と作業療法士の連携による研修会は沖縄県、熊本県に続いて3例目で今後、全国に広がっていくことが期待される。Hondaは各地域が自立して運転復帰プロセスを構築できるように、こうした活動を支援していく考えだ。

※自操安全運転プログラム＝実車運転時における現状の把握、そこから見えた課題に対する訓練を目的としたプログラム。Hondaの交通教育センターで実施している。



鹿児島県作業療法士協会 高齢者・障がい者運転検討委員会の井上勇人さんが鹿児島県内の病院施設における運転再開支援について紹介



鹿児島県警察本部交通部免許管理課課長補佐 水上朋雄さんが一定の病気に係る運転者対策について解説